

と傍測してある。

ヒヨウテンサイ 氷天齋 寶永三年九月豊臣秀吉の征討により渡來した朝鮮人の取調書によれば、氷天齋もその一人で、後に金澤に移り、名を七右衛門と改めて町人となり、豆腐を賣うたが、寛永二年病死したとある。氷天齋を氷天齋としたものは非である。

ヒヨウドウジ 平等寺 石川郡鶴來町に平等寺橋があり、その橋爪にもと平等寺と呼ぶ家があつたから、その附近が寺跡だらうと言はれてゐる。白山宮莊嚴講中記録正平十一年(延文元)三月十九日に、『依大洪水宮尻路崩失。平等寺並市、在家皆流失。』とあるから、白山宮尻にあつた平等寺が、後に鶴來の中に轉じたものでなからうか。

ヒヨウドウジ 平等寺 鳳至郡寺分_ニ在つて、眞言宗に屬する。貞享の書上には創立の年號も開基も知れぬといつてゐる。

ヒヨウドウジウチ 平等寺氏 白山比咩神社藏三宮古記に『水引神人一方年預平等寺十郎云々。』又『年預、事平等寺十郎進士入道、其次右衛門大夫』など見える。

ヒヨウドウジガハ 平等寺川 石川郡鶴來に在る。平等寺がその邊にあつたから、この名がある。

ヒヨウブサキ 屏風崎 ↓ヒヨウブセト 屏風瀬戸。

ヒヨウブセト 屏風瀬戸 七尾南灣と西灣との間に在る。その鹿島郡石崎から突出する岬を石崎屏風、能登島から突出するを須曾屏風又は深崎屏風といつて兩々相對する。一に上の屏風・下の屏風ともいひ、元祿十二年の能登釜には屏風崎・薄着崎と記し、石黒信由の

地圖には島屏風・浮屏風とする。高さ共に六米、長さ共に一軒弱。中間に屏風瀬戸を挟み、瀬戸の幅は七五〇米餘を測る。屏風崎の成因は海蝕に基づく斷崖であり、地質は凝灰岩質泥岩である。

ヒヨウブノキ 屏風之記 石川郡佐那武社には義經が北國落の時一夜宿泊したといひ、又信田小太郎がこの附近に落魄してゐたとの俗傳があつた。神主河崎秀憲その事を一雙の屏風に描かしめ、馬淵高定に笈搜之記の起草を請ひ、又己は信田記を書いた。屏風の記はこの二編を併せたものである。

ヒヨウリユウキ 漂流記 加賀・能登の船頭・水手が、藩内若しくは他領の船舶に乗組んで、外國に漂流した後歸國した時、藩吏の調査を受けた口書又は始末書の今に残るものが、凡そ四種ある。安永三年石川郡栗崎村藤藏船の神船頭傳次郎等のもの。天明七年大坂善三郎船の水手市之丞等のもの、文政九年越前海浦蓬萊屋船の水手吉左衛門のもの、天保元年備前岡山多賀屋船の水手清兵衛のものが、それで、是等を集めた加能漂流譚は石川縣圖書館協會から出版せられてゐる。尙この外に弘化元年鳳至郡皆月村彌三兵衛のものもある。

ヒヨクダキ 比翼瀧 江沼郡風谷の東、山麓僻蒼たる深林中にある。山中温泉から南へ三軒餘を隔てる。

ヒヨクツカ 比翼塚 もと金澤觀音院境内に在つた。高さ二一〇榎・幅九〇榎許の石碑中央に『比翼塚十太郎』、その右に『文政十二丑六月、卯辰若連中』と彫られてゐる。卯辰茶屋町の情死者の爲に建てたものと思はれる

が、その事實を明らかにせぬ。

ヒヨケマチ 火除町 金澤の町名。元祿九年の地子町肝煎敷許附に、天神町・火除町・田町と並べ載せる。延寶の金澤圖を見るに、火除町と記された所が甚だ多く、その頃までは所々に防火の爲空地を設けてあつたので、これもその一つである。享和三年幕府への進達書には火避町と記してある。

ヒヨシジンジャ 日吉神社 鳳至郡中居南に在つて、もと南北郷大宮山王といつた。社藏に、絹本着色淨土曼荼羅圖一丈七・横一米六二があつて、鎌倉末期乃至室町初期の作と認められ、外に木造金剛界大日如來像体高九四寸は腐蝕してゐるが鎌倉末期のものと認められてゐる。

ヒヨシマチ 日吉町 ↓ヒロロカサンノウミチ 廣岡山王道。

ヒヨリヤマ 日和山 石川郡宮腰(今金石)にある砂丘。

ヒヨリヤマ 日和山 珠洲郡小木の海岸にある小丘。

ヒラ 比良 鳳至郡南北郷に屬する部落。天文元年七月諸橋六郷南北棟敷注文にひら月崎と見える。當時はこの村を比良月崎といつたのであらう。能登各跡志に『比良村、川尻より二十町あり。寶延寺(法樂寺)といふ西方一向宗の寺に不思議なる靈石あり。此外同宗二寺あり。長八間半のはね橋あり。此邊風景なり。』とある。

ヒライシ 比良石 鳳至郡比良に産する石材。安山岩質凝灰岩で、鼠色の安山岩質石基中に、長石類の分解した輕石様大塊を多數に含み、間々黒色の大塊を介在せしめる。

ヒライハ 平岩 能美郡牛首川の上流右岸に在る岩石。越前國名蹟考に『風嵐より一里半行て一本橋あり。危し。大杉谷の橋といふ。是より半里行て平岩といふ所あり。左は山、右は川なり。二十丈ばかりの平らなる石、川の邊より水中まで横たはれり。此所白山禪定の人、一の垢離を取る所といふ。水石清淨の地なり。』と記する。但し一里半といひ一里といふものは違きに失し、風嵐から平岩まで三軒許である。

ヒライハセンケイ 平岩仙桂 仙山と號し、所居を忘筌寮。一柳齋又は稀顔齋と稱した。平安の人。父は慶齋、薩摩侯に仕へ、正保三年歿。仙桂萬治四年加賀藩に臣事し、三百石を受けた。寛文十一年の土帳に三百石組外儲者平岩仙桂四十五歳と記されるもの即ち是である。寛文十二年辭して京に上り、時仙堂に住し、藩は之に二十人扶持を興へた。著す所忘筌寮藥集六卷・彌北吟藁一卷・甲辰紀行一卷がある。

ヒラオモテ 平面 モテ 能美郡徳橋郷に屬する部落。

ヒラカ 平加 石川郡長屋庄に屬する部落。古蹟比良の遺で、三宮古記には尙比業の文字が用ひられてゐる。椋部考古遊記に、この村の西沙漠中に二木道仙の館迹があると記する。

ヒラカエキ 比業驛 兵部式に加賀國驛馬朝倉津津・安宅・比業中略各五疋とあるもので、その安宅と比業とは能美郡に屬する。今手取川の流域變じて、石川郡に平加村がある。ヒラカガハ 比業河 三代實録貞觀十一年二月廿三日の詔に、『加賀國比業河置半輪渡